

農薬についてのアンケート

調査研究報告書

平成 18 年 12 月

株式会社NHKエンタープライズ

目 次

I. 総 括

1. 調査概要 3

2. 調査結果の要約 7

- (1) 農薬についての知識の浸透度・理解度の実態 7
- (2) 今後の課題～食品安全委員会に期待されていること～ 10

II. アンケート集計結果のまとめ

- Q1. あなたが、買ったり食べたりする野菜は、主にどのタイプですか？(いくつでも) 13
- Q2. 売られている野菜や果物には、一般的に農薬が残留していると思いますか？ 14
- Q3. いわゆる有機野菜や有機果物は、そうでないものより体に良いと思いますか？ 15
- Q4. 野菜や果物は、国内産より外国産の方が、農薬が多く残留していると思いますか？ 16
- Q5. 野菜や果物を食べることで、体内に農薬を取り込んでいると思いますか？ 17
- Q6. 食品を通して体内に取り込んだ農薬は、体に蓄積されると思いますか？ 18
- Q7. 少しでも農薬が残留している野菜や果物を食べると、体調不良を起こすと思いますか？ 19
- Q8. 食品に残留している農薬を体内に取り込むと、どんな悪影響が現れると思いますか？(いくつでも) 20
- Q9. 家庭で行っている残留農薬の対策は何ですか？(いくつでも) 21
- Q10. 野菜や果物の栽培では、農薬の使用基準などが定められていると思いますか？ 22
- Q11. 農薬に関するどんな情報を知りたいですか？(いくつでも) 23
- Q12. 今年5月29日から、農薬を規制する制度が新しくなり、ポジティブリスト制度と呼ばれる仕組みがスタートしたことを知っていますか？ 24
- Q13. ポジティブリストで、およそ何種類の農薬を規制していると思いますか？ 25
- Q14. 農薬の残留基準の設定には、「ADI(一日摂取許容量)」と呼ばれる数値が、基準になっていることを知っていますか？ 26
- Q15. ADI(一日摂取許容量)は、動物実験で得られた農薬の安全基準値と比べて 100 倍厳しく設定されています。この安全基準なら安心だと感じますか？ 27

I. 総括

1. 調査概要

(1) 調査テーマ »

農薬についてのアンケート

(2) 調査目的 »

農薬について一般生活者が偏った誤解や思い込みをしていると考えられる事柄をアンケートに設定し、農薬に対する知識の浸透度や理解度を把握する。

今回は、広報ビデオの制作にむけて、主な対象者に想定する20～30代女性の実態に迫るために、一般生活者400名および20～30代女性600名、計1000名を対象にアンケート調査を実施した。

(3) 主な調査項目 »

以下の農薬についての10の誤解を検証する。

- 誤解1 売場にある野菜や果物には農薬が多く残留している
- 誤解2 農作物は、国産物より輸入物のほうが、残留農薬が検出される割合が高い
- 誤解3 有機栽培の農作物には、農薬は絶対に使われていない
- 誤解4 普段、私たちは農薬を摂取していない／体内に農薬はない
- 誤解5 農薬が少しでも体内に入ると健康の害になる
- 誤解6 残留農薬が口に入ると急性中毒になる／死に至る
- 誤解7 量に関係なく、残留農薬はアレルギーや癌などの原因になる
- 誤解8 農薬は体内に入ると長く蓄積される／排出されない
- 誤解9 田畑で使われた農薬は分解されず、土壌中に蓄積される
- 誤解10 農業で使われる農薬は、植物や昆虫など生態系に悪影響を与えている

… 参照【別紙1】「農薬についてのアンケート」の構成

(4) 調査対象 »

- 一般生活者 400名(20～50代男女)
- 20～30代女性 600名(未婚女性、既婚女性 各300名)

… 参照【別紙2】サンプルの特徴

(5) 調査方法 »

Web アンケート調査

(6) 調査期間 »

平成18年9～11月(Webアンケート実施 9月15～20日の6日間)

【別紙1】「農薬についてのアンケート」の構成

- Q1. あなたが、買ったり食べたりする野菜は、主にどのタイプですか？(いくつでも)
- Q2. 売られている野菜や果物には、一般的に農薬が残留していると思いますか？
- Q3. いわゆる有機野菜や有機果物は、そうでないものより体に良いと思いますか？
- Q4. 野菜や果物は、国内産より外国産の方が、農薬が多く残留していると思いますか？
- Q5. 野菜や果物を食べることで、体内に農薬を取り込んでいると思いますか？
- Q6. 食品を通して体内に取り込んだ農薬は、体に蓄積されると思いますか？
- Q7. 少しでも農薬が残留している野菜や果物を食べると、体調不良を起こすと思いますか？
- Q8. 食品に残留している農薬を体内に取り込むと、どんな悪影響が現れると思いますか？(いくつでも)
- Q9. 家庭で行っている残留農薬の対策は何ですか？(いくつでも)
- Q10. 野菜や果物の栽培では、農薬の使用基準などが定められていると思いますか？
- Q11. 農薬に関するどんな情報を知りたいですか？(いくつでも)
- Q12. 今年 5 月 29 日から、農薬を規制する制度が新しくなり、ポジティブリスト制度と呼ばれる仕組みがスタートしたことを知っていますか？
- Q13. ポジティブリストで、およそ何種類の農薬を規制していると思いますか？
- Q14. 農薬の残留基準の設定には、「ADI(一日摂取許容量)」と呼ばれる数値が、基準になっていることを知っていますか？
- Q15. ADI(一日摂取許容量)は、動物実験で得られた農薬の安全基準値と比べて 100 倍厳しく設定されています。この安全基準なら安心だと感じますか？

【サンプル数の割付とスクリーニングのための事前調査項目】

年代・性別(F1)／未婚・既婚(F2)

家の食事のための食材購入頻度(F3)

…「週 1 回未満」は除外し、「週 1 回以上」を対象とした。

同居している家族構成(F4)／居住地域(F5)

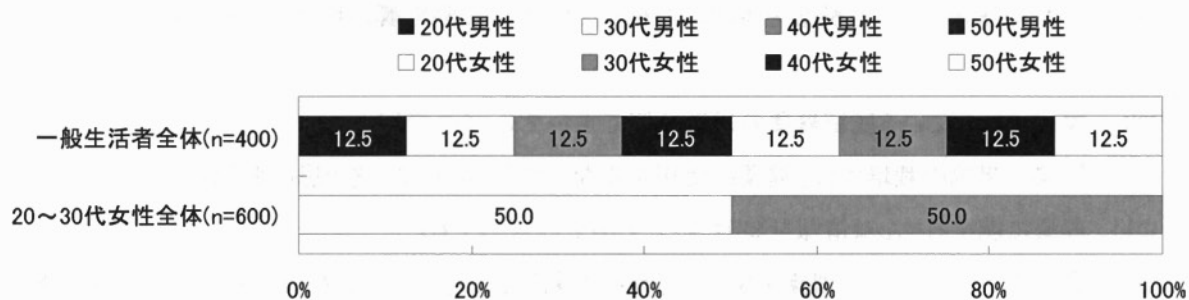
【別紙2】 サンプルの特徴

以下は、調査対象となった一般生活者(n=400)、20～30代女性(n=600)の対象サンプルの基本属性である。

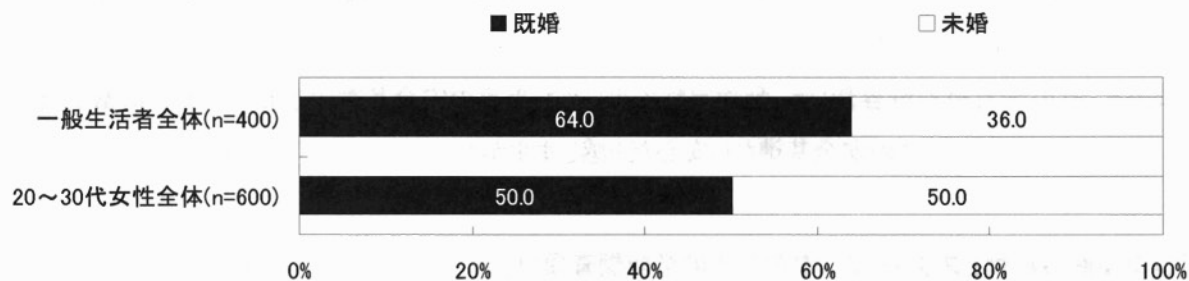
一般生活者については、【年代・性別】でサンプル数を均等とした。

20～30代女性については、20代/30代を均等とし、さらに【既婚・未婚】を均等とした。

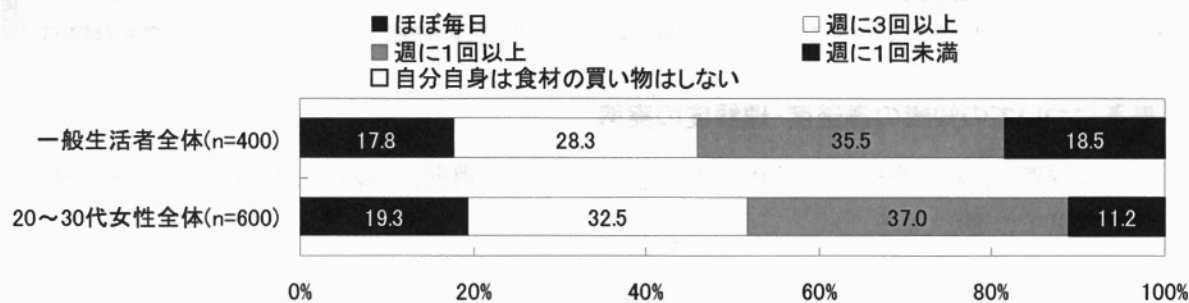
【年代・性別】



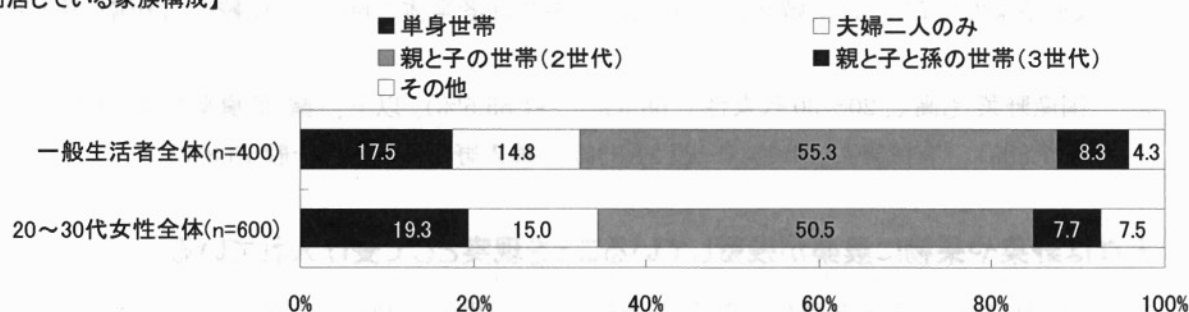
【既婚・未婚】



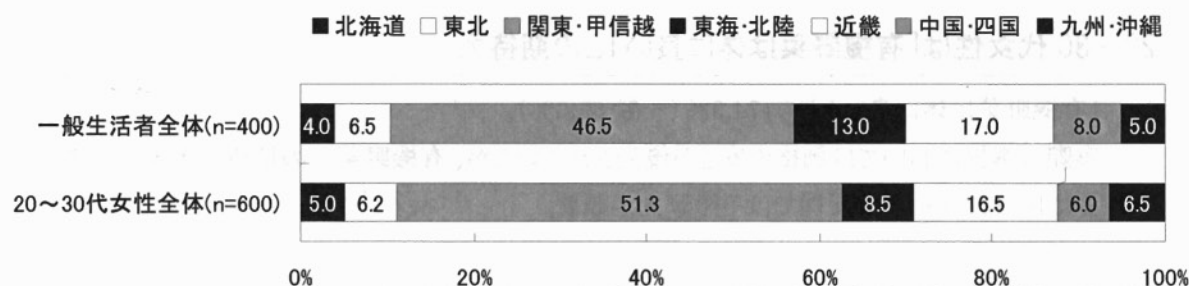
【家の食事のための食材購入頻度】



【同居している家族構成】



【居住地域】



2. 調査結果の要約

(1) 農薬についての知識の浸透度・理解度の実態

今回の調査の、ターゲットとなる 20～30 代女性における、農薬についての知識の浸透度・理解度の特徴は以下の通りである。

「価格が安い野菜」が最大の選択理由

- ◇ 買ったり食べたりする野菜の選択においては、「価格が安い野菜」が最大の選択理由。20～30 代未婚女性で 74.7%、既婚女性で 76.7%。一般生活者全体の 66.5%と比較し、より選択率が高い。
- ◇ 「国産野菜」も高く、20～30 代女性で 68.5%（一般 65.5%）。以下、「減/低農薬野菜」26.5%（一般 27.8%）、「有機野菜」21.2%（一般 21.8%）、「輸入野菜」16.7%（一般 15.8%）。

人々は野菜や果物に農薬が残留していることを現実として受け入れている

- ◇ 「売られている野菜や果物には農薬が残留していると思う」5 割強、「品物によっては残留していると思う」が 4 割強。「思わない」は全体の 4%程度。性年代に関わらず同様の傾向。

20～30 代女性は「有機野菜は体に良い」との期待大

- ◇ 「有機野菜は体に良いと思う」74.3%（一般 69.0%）。
- ◇ 実際の選択においては価格の安さが優先されているが、有機野菜への期待は大きく、一般生活者に比べ、20～30 代女性ではその傾向が顕著。

「農薬が残留しているのは国内産より外国産」というイメージが定着

- ◇ 「野菜や果物は国内産より外国産の方が、農薬が多く残留していると思う」という思い込みが高い 76.2%（一般 79.8%）。

農薬は体内に取り込まれ蓄積されていくと思われている

- ◇ 「野菜や果物を食べることで、体内に農薬を取り込んでいると思う」70.8%（一般 75.5%）、「思わない」6.2%（一般 6.8%）、「わからない」23.0%（一般 17.8%）。
- ◇ 「食品を通して体内に取り込んだ農薬は体に蓄積されると思う」68.0%（一般 73.0%）、「思わない」4.7%（一般 7.5%）、「わからない」27.3%（19.5%）。

意外にも農薬が体調不良の原因と考える女性は少数派

- ◇ 「少しでも農薬が残留している野菜や果物を食べると体調不良を起こすと思う」2割、「思わない」が4割弱、「わからない」が4割強。
- ◇ 「体調不良を起こすと思う」20～30代未婚女性 24.7%、既婚女性 16.0%。
- ◇ 「わからない」20～30代未婚女性 39.0%、既婚女性 45.7%。

体内に取り込んだ農薬による悪影響の内容は、属性によって相違する 20～30代未婚女性の7割以上が「妊娠中の胎児への影響」に不安を抱いている

- ◇ 一般生活者は、「アレルギーへの影響」65.5%、「環境ホルモン作用による生殖への影響」64.5%、「癌などにかかりやすくなる」55.5%、「妊娠中の胎児への影響」54.8%
- ◇ 20～30代既婚女性は、「アレルギー～」68.3%、「環境ホルモン作用～」36.3%、「妊娠中の胎児への影響」60.0%、「癌～」46.3%。
- ◇ 20～30代未婚女性は、「妊娠中の胎児への影響」72.0%、「アレルギー～」68.3%、「環境ホルモン作用～」62.0%、「癌～」48.3%。

8割以上が家庭での残留農薬対策を行っている 20～30代未婚女性は無農薬栽培の農作物に関心を寄せる

- ◇ 「よく洗う」は、20～30代未婚女性 76.3%、既婚女性 76.7%（一般 75.0%）。
- ◇ 「火を通す」は、それぞれ 47.7%、50.3%（一般 41.0%）。
- ◇ 「無農薬栽培の農作物を選ぶ」は、それぞれ、29.7%、21.0%（一般 28.5%）。

「農薬の使用規準などが定められていると思う」のは6割程度

- ◇ 野菜や果物の栽培では「農薬の使用規準などが定められていると思う」61.7%（一般 66.5%）、「わからない」26.7%（一般 19.0%）。

知りたい情報は検査体制や安全基準よりも体への影響

- ◇ 農薬に関して知りたい情報の上位は、「体内に取り込んでしまった農薬の影響」83.0%（一般 79.8%）、「食品の残留農薬の実態」77.8%（一般 73.8%）、「農薬の毒性」65.7%（58.3%）。いずれも20～30代女性の方が関心が高い。
- ◇ 「残留農薬の検査体制」「農薬の科学的な安全基準」といった体制や規準よりも、自らの体への影響に対する不安が大きい。
- ◇ 20～30代女性からは、「入ってしまった農薬を体外に排出する方法」「取り込まないようにするための方法」を知りたいといったコメントが複数挙げられた。

ポジティブリスト制度、ADI(一日摂取許容量)の認知度は極めて低い 厳しいADIの設定も安心にはつながらない

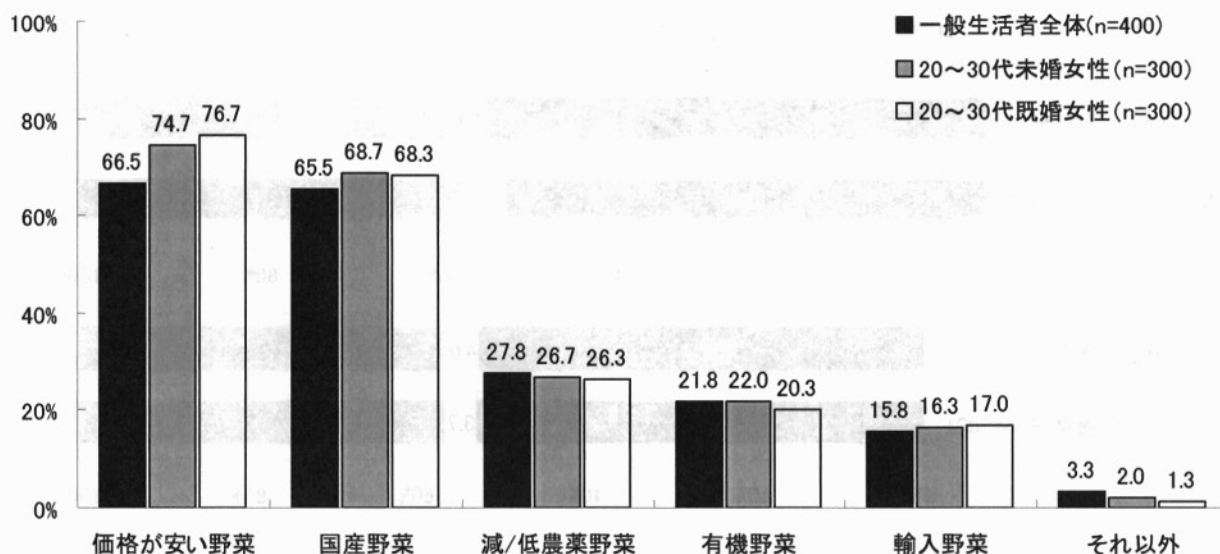
- ◇ 今年5月29日から、農薬を規制する制度が新しくなり、ポジティブリスト制度と呼ばれる仕組みがスタートしたことを、「知っている」3.0%(一般 6.3%)、「聞いたことはある」14.0%(一般 19.0%)、「知らない」83.0%(一般 74.8%)。
- ◇ ポジティブリストで規制する農薬の数「約 800 種類」に対して、大半が「約 100 種類」「約 400 種類」のいずれかに回答。
- ◇ 農薬の残留基準の設定には、ADI(一日摂取許容量)と呼ばれる数値が基準になっていることを、「知っている」3.5%(一般 5.8%)、「聞いたことはある」13.3%(一般 18.8%)、「知らない」83.2%(一般 75.5%)。
- ◇ ADI が動物実験で得られた農薬の安全基準値と比べて 100 倍厳しく設定されていることは、「安心できる」15.2%(一般 19.0%)、「まだ不安」40.8%(一般 39.3%)、「わからない」44.0%(一般 41.8%)。

(2) 今後の課題～食品安全委員会に期待されていること～

多くの一般生活者が、農薬の残留性、分解性、蓄積性についての誤解している現状がある。従って、それらの科学的に正しい知識を提供することによって、農薬による人間の健康への影響や、農薬の科学的なリスク評価についての消費者の理解は促進するだろう。一般消費者向けの農薬のリスク評価に関する正しい科学的知識を提供する啓発ルールが望まれる。

Ⅱ. アンケート集計結果のまとめ

Q1. あなたが、買ったり食べたりする野菜は、主にどのタイプですか？ (いくつでも)



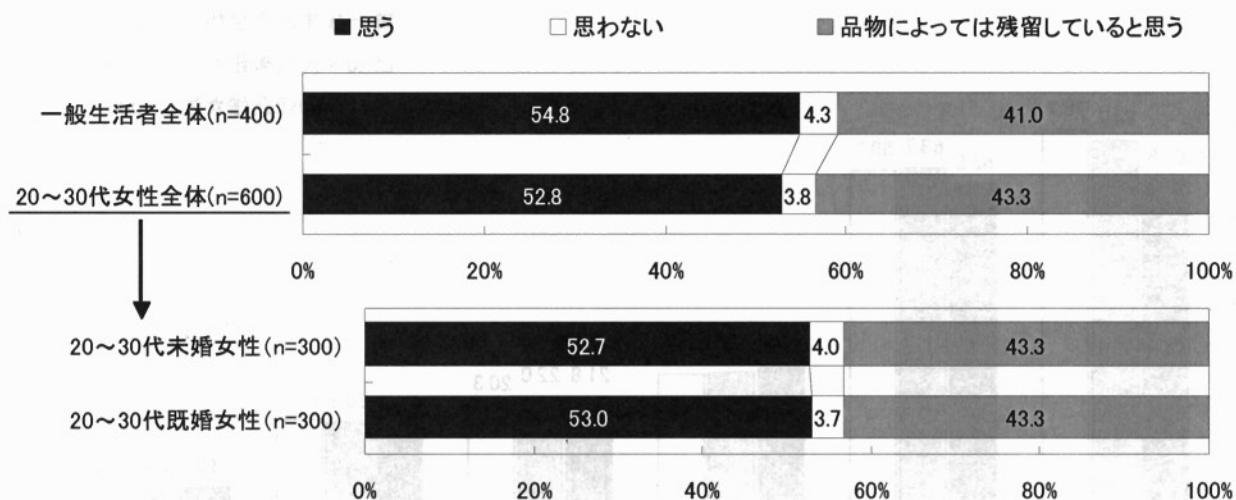
買ったり食べたりする野菜の選択においては、「価格が安い野菜」が最も回答率が高い。特に 20～30 代女性においては、既婚者で 76.7%、未婚者で 74.7%と、一般生活者の 66.5%と比較し、より関心が高いことがわかる。次に回答が多かったのは、「国産野菜」で、20～30 代女性全体では 68.5%、一般生活者全体では 65.5%となっており、こちらも 20～30 代女性のほうが、若干高めの回答比率となっている。3 位以下は、「減/低農薬野菜」が 20～30 代女性で 26.5%（一般 27.8%）、「有機野菜」が 20～30 代女性で 21.2%（一般 21.8%）、「輸入野菜」が 20～30 代女性で 16.7%（一般 15.8%）となっており、20～30 代女性の回答比率は一般生活者とはほぼ変わらない。それ以外として、「農家から直接もらったもの」「親戚や近所の人がつくった野菜」「自家製・家庭菜園」というように、身近な人や自分自身が栽培した野菜についての記述が 20 件あった。

このように、「国産」「減/低農薬」「有機」へのこだわりや、生産者の顔がみえる安全・安心への期待をもちながらも、「価格が安い野菜」は絶対の欲求であるといえる。

【買ったり食べたりする野菜のタイプ】

	有機野菜	減/低農薬野菜	価格が安い野菜	国産野菜	輸入野菜	それ以外
一般生活者全体 (n=400)	21.8	27.8	66.5	65.5	15.8	3.3
20～30 代女性全体 (n=600)	21.2	26.5	75.7	68.5	16.7	1.7
未婚女性 (n=300)	22.0	26.7	74.7	68.7	16.3	2.0
既婚女性 (n=300)	20.3	26.3	76.7	68.3	17.0	1.3

Q2. 売られている野菜や果物には、一般的に農薬が残留していると思いますか？

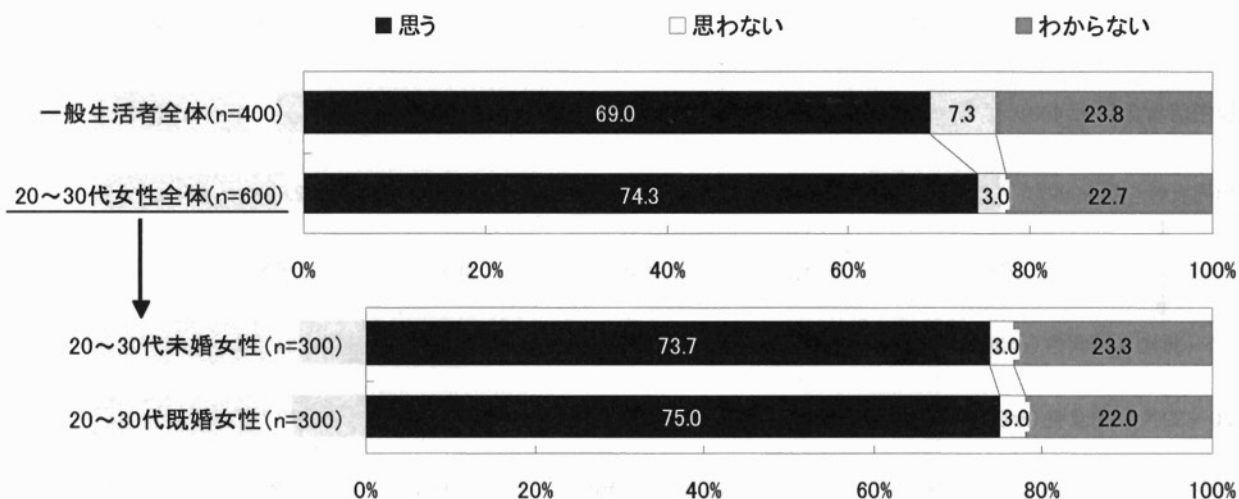


売られている野菜や果物には農薬が残留していることについて、「思う」が 5 割強、「品物によっては残留していると思う」が 4 割強。「思わない」との回答は全体の 4%程度に過ぎない。20～30 代女性全体と一般生活者全体の傾向、20～30 代女性における未婚者と既婚者の傾向ともほぼ同様である。

【野菜や果物には農薬が残留している】

	思う	思わない	品物によっては 残留していると思う
一般生活者全体 (n=400)	54.8	4.3	41.0
20～30 代女性全体 (n=600)	52.8	3.8	43.3
未婚女性 (n=300)	52.7	4.0	43.3
既婚女性 (n=300)	53.0	3.7	43.3

Q3. いわゆる有機野菜や有機果物は、そうでないものより体に良いと思いますか？

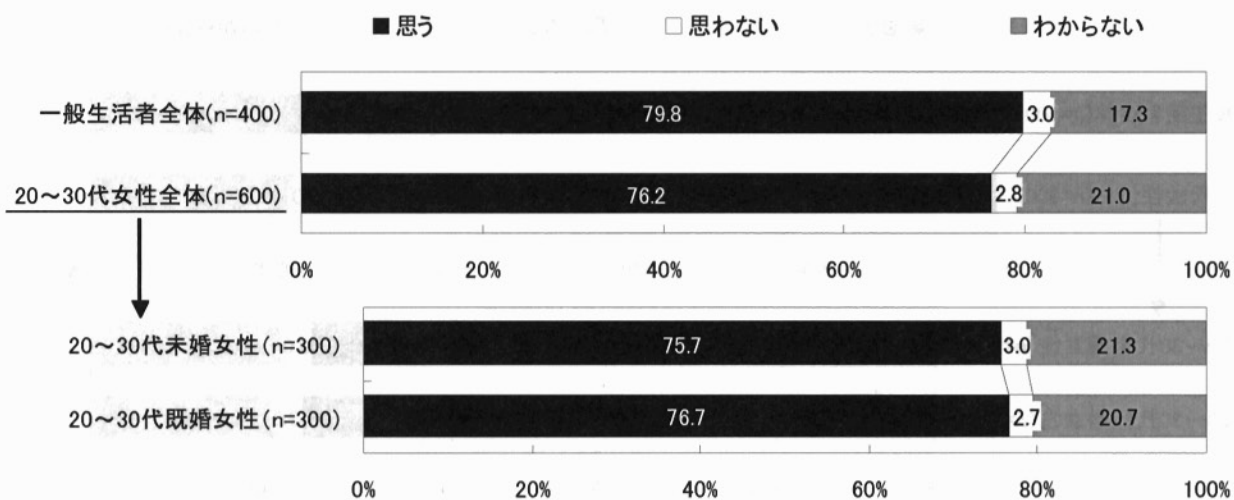


有機野菜については、20～30 代女性の 74.3%、一般生活者の 69.0%が「体に良いと思う」と回答している。実際の選択においては価格の安さが第一に優先されているが、有機野菜への期待は大きく、一般生活者に比べ、20～30 代女性ではその傾向が特に強く表れている。

【有機野菜や果物は体に良い】

	思う	思わない	わからない
一般生活者全体 (n=400)	69.0	7.3	23.8
20～30 代女性全体 (n=600)	74.3	3.0	22.7
未婚女性 (n=300)	73.7	3.0	23.3
既婚女性 (n=300)	75.0	3.0	22.0

Q4. 野菜や果物は、国内産より外国産の方が、農薬が多く残留していると思いますか？

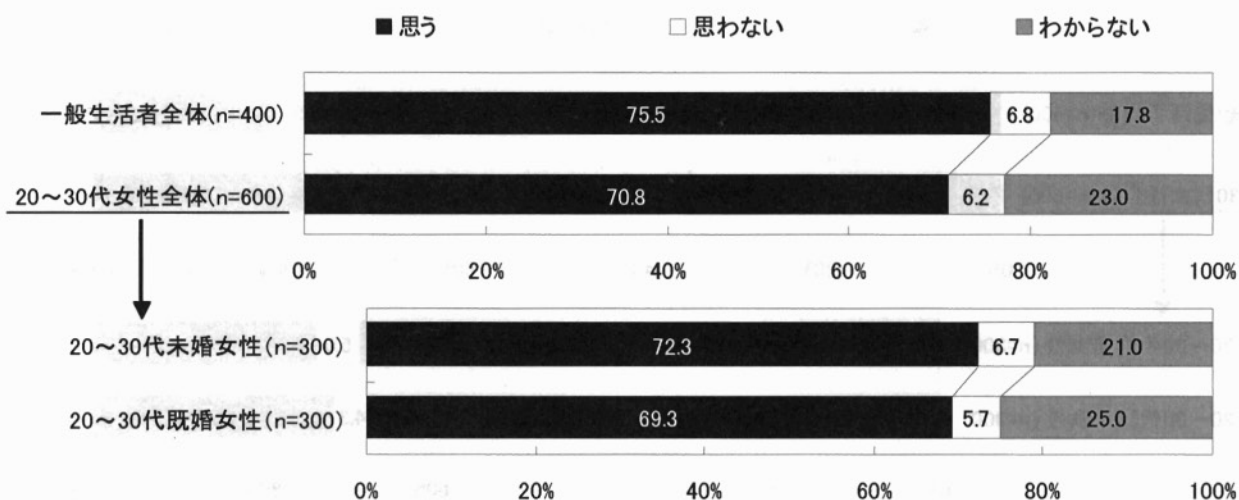


20～30代女性の76.2%、一般生活者の79.8%が、「野菜や果物は国内産より外国産の方が、農薬が多く残留していると思う」としている。実際に流通しているものについては差がないにも関わらず、外国産の野菜や果物に多く農薬が残留しているイメージが圧倒的に強いことを表している。

【国内産より外国産の方が農薬が多く残留している】

	思う	思わない	わからない
一般生活者全体 (n=400)	79.8	3.0	17.3
20～30代女性全体 (n=600)	76.2	2.8	21.0
未婚女性 (n=300)	75.7	3.0	21.3
既婚女性 (n=300)	76.7	2.7	20.7

Q5. 野菜や果物を食べることで、体内に農薬を取り込んでいると思いますか？ ※

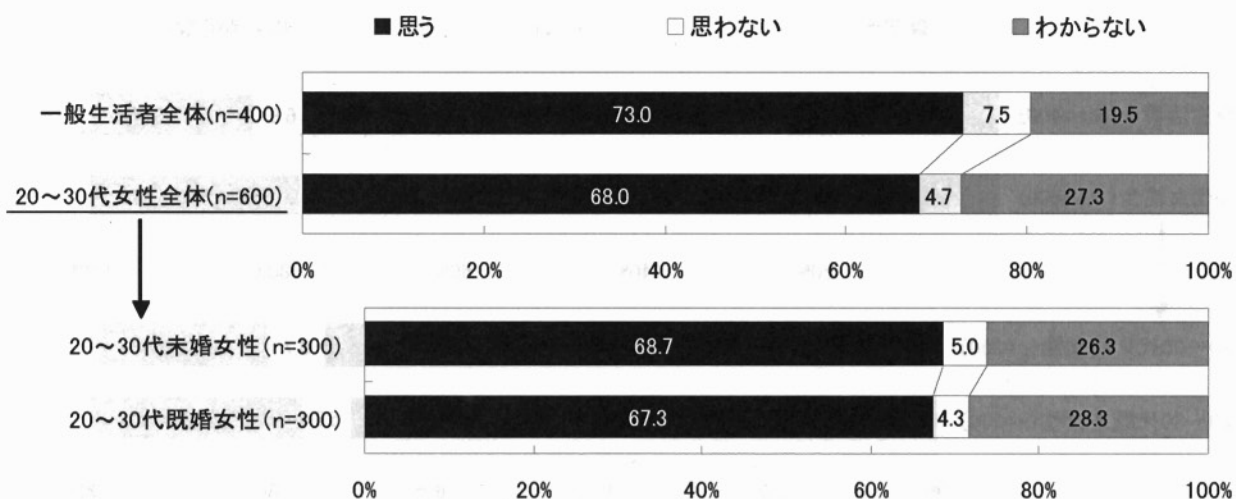


20～30代女性の70.8%、一般生活者ではそれを上回る75.5%が、「野菜や果物を食べることで、体内に農薬を取り込んでいると思う」と回答している。また、「わからない」との回答は、20～30代女性23.0%で、一般生活者の17.8%を上回りっている。

【食べることで体内に農薬を取り込んでいる】

	思う	思わない	わからない
一般生活者全体 (n=400)	75.5	6.8	17.8
20～30代女性全体 (n=600)	70.8	6.2	23.0
未婚女性 (n=300)	72.3	6.7	21.0
既婚女性 (n=300)	69.3	5.7	25.0

Q6. 食品を通して体内に取り込んだ農薬は、体に蓄積されると思いますか？

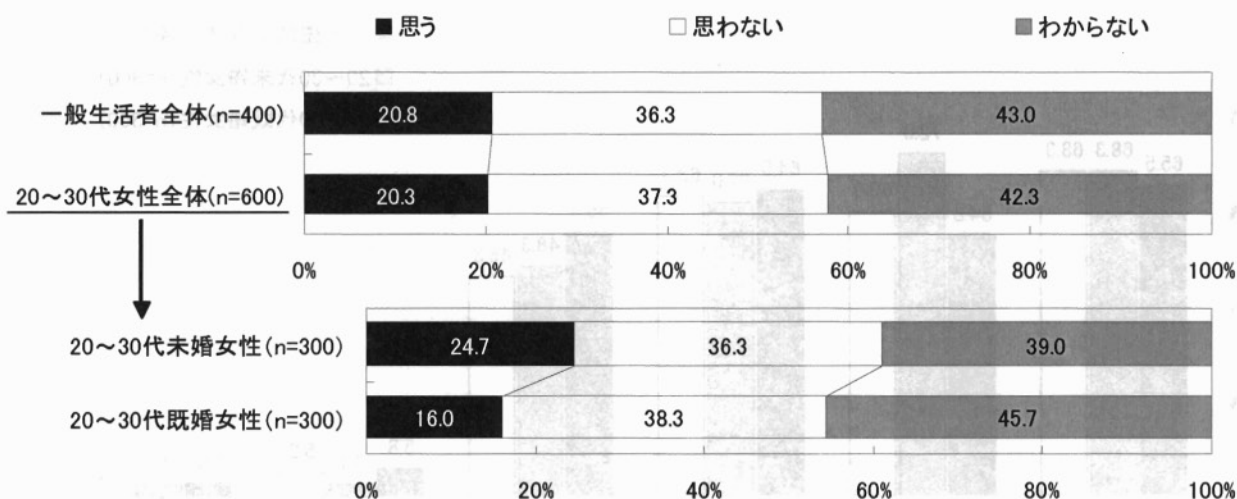


20～30代女性の68.0%、一般生活者ではそれを上回る73.0%が、「食品を通して体内に取り込んだ農薬は体に蓄積されると思う」と回答している。

【農薬は体に蓄積される】

	思う	思わない	わからない
一般生活者全体 (n=400)	73.0	7.5	19.5
20～30代女性全体 (n=600)	68.0	4.7	27.3
未婚女性 (n=300)	68.7	5.0	26.3
既婚女性 (n=300)	67.3	4.3	28.3

Q7. 少しでも農薬が残留している野菜や果物を食べると、体調不良を起こすと思いますか？



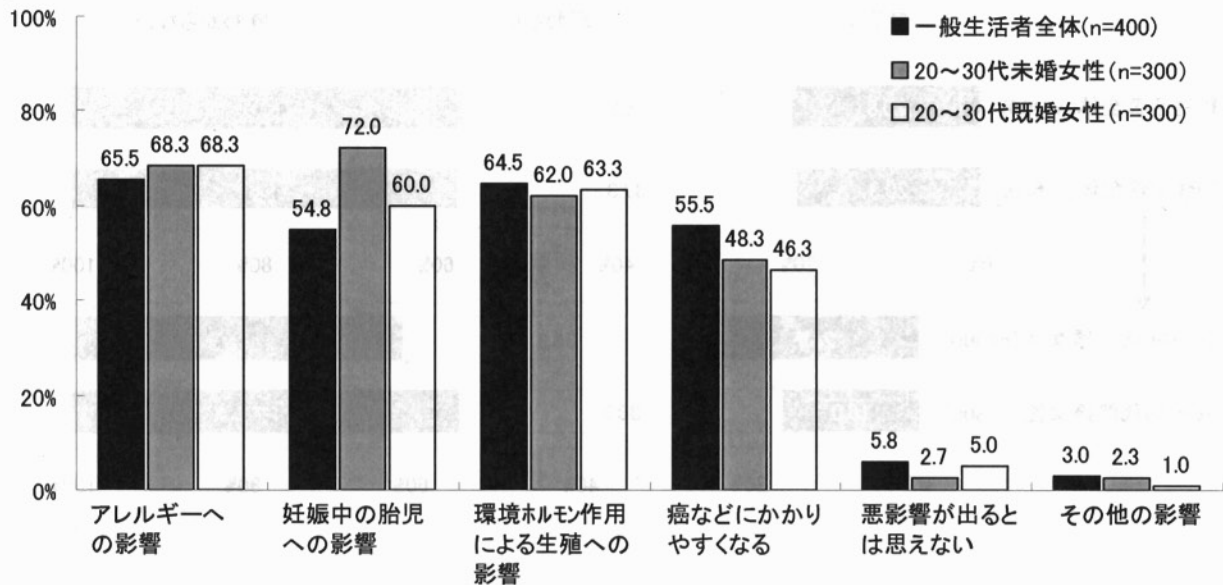
少しでも農薬が残留している野菜や果物を食べると体調不良を起こすことについては、一般生活者も 20～30 代女性も同様の傾向であり、概ね「思う」が 2 割、「思わない」が 4 割弱、「わからない」が 4 割強という構成である。

ただし、20～30 代女性の、未婚女性と既婚女性を比べると、「体調不良を起こすと思う」は既婚女性が 16.0%に対し、未婚女性は 24.7%で、農薬が体調不良に結びつくイメージがより強い。

【農薬が残留している野菜や果物を食べると体調不良を起こす】

	思う	思わない	わからない
一般生活者全体 (n=400)	20.8	36.3	43.0
20～30 代女性全体 (n=600)	20.3	37.3	42.3
未婚女性 (n=300)	24.7	36.3	39.0
既婚女性 (n=300)	16.0	38.3	45.7

Q8. 食品に残留している農薬を体内に取り込むと、どんな悪影響が現れると思いますか？(いくつでも)



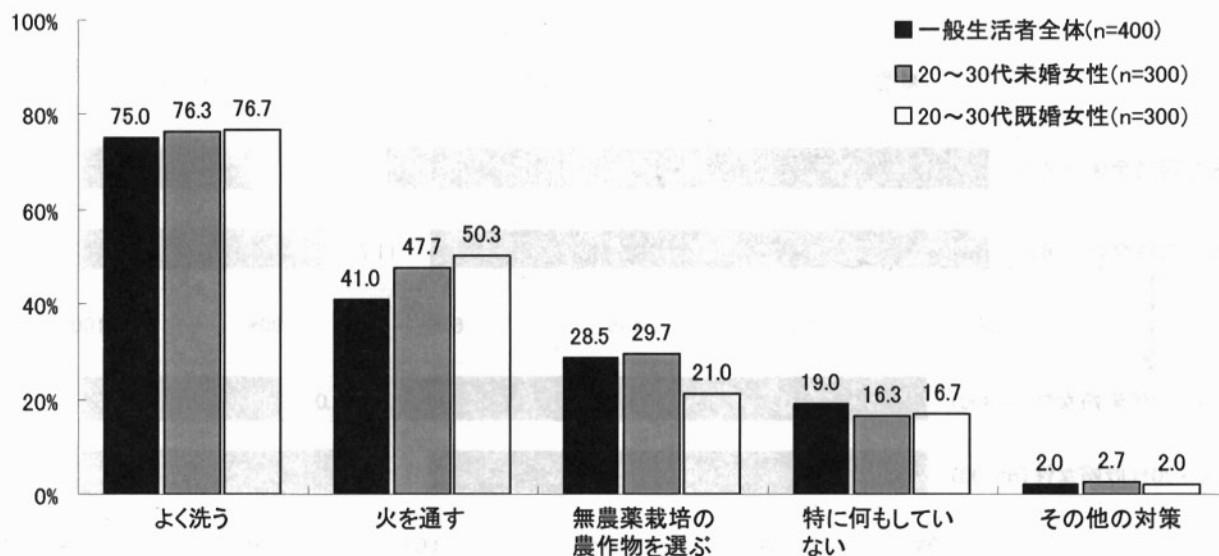
食品に残留している農薬を体内に取り込むことによる悪影響については、一般生活者と 20～30 代女性、さらに、未婚女性と既婚女性とでは明らかな違いが見られる。

一般生活者では、「アレルギーへの影響」65.5%、「環境ホルモン作用による生殖への影響」64.5%、「癌などにかかりやすくなる」55.5%、「妊娠中の胎児への影響」54.8%となっている。ところが、20～30 代女性ではこれらの 4 項目の順位が変化する。20～30 代既婚女性においては「アレルギー～」68.3%、「環境ホルモン作用～」36.3%、「妊娠中の胎児への影響」60.0%、「癌～」46.3%。未婚女性においては、「妊娠中の胎児への影響」が 72.0%と最も高く、続いて「アレルギー～」68.3%、「環境ホルモン作用～」62.0%、「癌～」48.3%。「悪影響が出るとは思えない」の回答は 20～30 代未婚女性が 2.7%と最も低く、何らかの体への悪影響の懸念が最も強いといえる。その他の影響としては、「頭痛や下痢」「成長期の子どもに悪影響」「クローン病など先進国に多い難病」「内臓疾患」「花粉症」「免疫力低下」「血が悪くなりそう」といったコメントが挙げられた。

【農薬を体内に取り込むと現れると思う悪影響】

	アレルギーへの影響	妊娠中の胎児への影響	環境ホルモン作用による生殖への影響	癌などにかかりやすくなる	悪影響が出るとは思えない	その他の影響
一般生活者全体 (n=400)	65.5	54.8	64.5	55.5	5.8	3.0
20～30 代女性全体 (n=600)	68.3	66.0	62.7	47.3	3.8	1.7
未婚女性 (n=300)	68.3	72.0	62.0	48.3	2.7	2.3
既婚女性 (n=300)	68.3	60.0	63.3	46.3	5.0	1.0

Q9. 家庭で行っている残留農薬の対策は何ですか？(いくつでも)

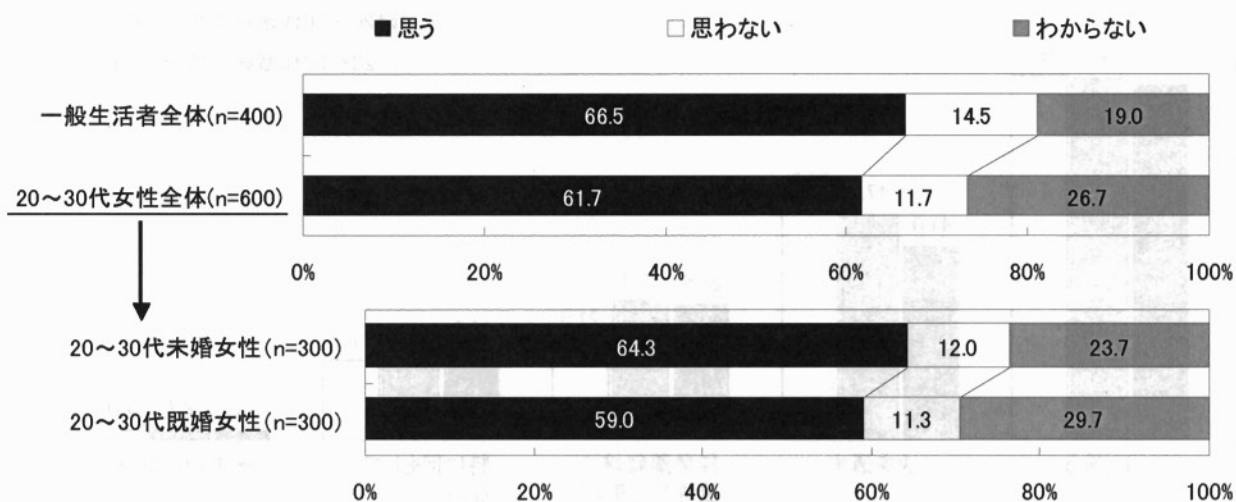


家庭で行っている残留農薬の対策として、最も多かったのは「よく洗う」という回答である。一般生活者では75.0%、20～30代未婚女性で76.3%、既婚女性76.7%といずれもこれに該当する。次に「火を通す」がそれぞれ41.0%、47.7%、50.3%。一方、特に「何もしていない」とするのは、いずれの層も2割弱程度で、8割以上の方は日常生活のなかで何らかの対策を行っていることがわかる。その他の対策としては、「皮をむく、皮を厚くむく」が5件と多く、「信用できるお店で買う・自家栽培」、「中国産は買わない」等もそれぞれ複数から挙げられた。

【家庭で行っている残留農薬の対策】

	よく洗う	火を通す	無農薬栽培の農作物を選ぶ	特に何もしていない	その他の対策
一般生活者全体 (n=400)	75.0	41.0	28.5	19.0	2.0
20～30代女性全体 (n=600)	76.5	49.0	25.3	16.5	2.3
未婚女性 (n=300)	76.3	47.7	29.7	16.3	2.7
既婚女性 (n=300)	76.7	50.3	21.0	16.7	2.0

Q10. 野菜や果物の栽培では、農薬の使用基準などが定められていると思いますか？

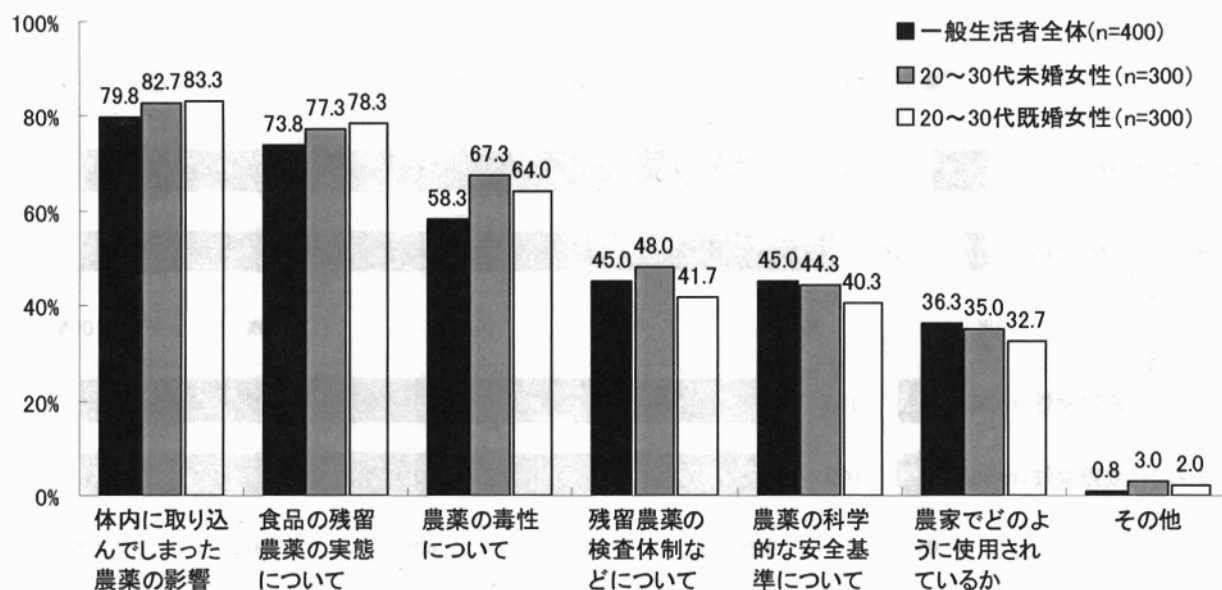


野菜や果物の栽培の「農薬の使用基準などが定められていると思う」との回答は、20～30代女性が61.7%で、一般生活者の66.5%をやや下回り、その分「わからない」が26.7%と高い。さらに、20～30代女性では、既婚女性のほうが未婚女性より「わからない」との回答比率が高い。

【農薬の使用基準などが定められている】

	思う	思わない	わからない
一般生活者全体 (n=400)	66.5	14.5	19.0
20～30代女性全体 (n=600)	61.7	11.7	26.7
未婚女性 (n=300)	64.3	12.0	23.7
既婚女性 (n=300)	59.0	11.3	29.7

Q11. 農薬に関するどんな情報を知りたいですか？(いくつでも)

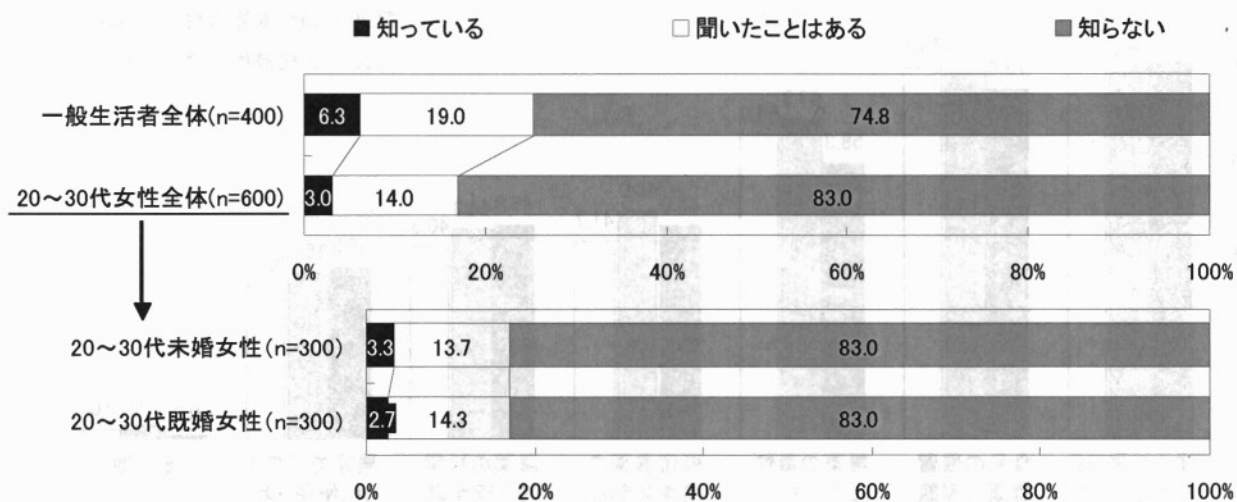


農薬に関して知りたい情報の上位は、「体内に取り込んでしまった農薬の影響」「食品の残留農薬の実態」「農薬の毒性」となっている。いずれの項目も、一般生活者よりも20～30代女性において明らかに高くなっている。4位以下に挙げられるような「残留農薬の検査体制」「農薬の科学的な安全基準」「農家でどのように使用されているか」といった体制や規準等よりも、自らの体への影響に対する不安が大きいことをうかがわせる。その他の知りたい情報として「入ってしまった農薬を体外に排出する方法」「取り込まないようにするための方法」「残留農薬の除去方法」「野菜の洗浄方法」「調理する際にどのようにすれば残留農薬を除去できるか」など排出や除去についてのコメントが20～30代女性から複数回答され、排出したい欲求があることがわかる。

【農薬について知りたい情報】

	体内に取り込んでしまった農薬の影響	食品の残留農薬の実態について	農薬の毒性について	残留農薬の検査体制などについて	農薬の科学的な安全基準について	農家でどのように使用されているか	その他
一般生活者全体 (n=400)	79.8	73.8	58.3	45.0	45.0	36.3	0.8
20～30代女性全体 (n=600)	83.0	77.8	65.7	44.8	42.3	33.8	2.5
未婚女性 (n=300)	82.7	77.3	67.3	48.0	44.3	35.0	3.0
既婚女性 (n=300)	83.3	78.3	64.0	41.7	40.3	32.7	2.0

Q12. 今年 5 月 29 日から、農薬を規制する制度が新しくなり、ポジティブリスト制度と呼ばれる仕組みがスタートしたことを知っていますか？

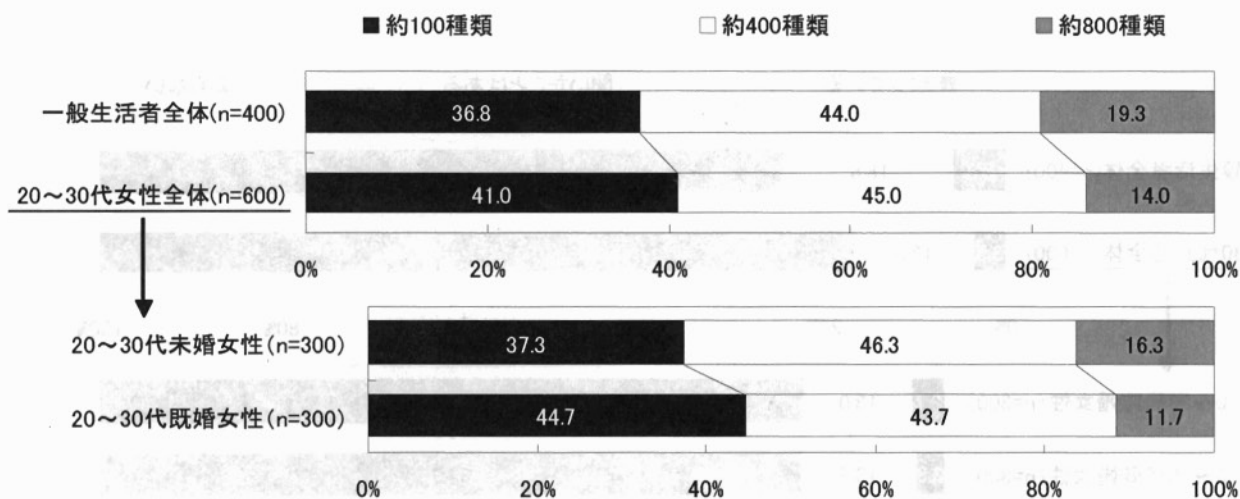


ポジティブリスト制度については、認知は極めて低く、「知っている」との回答は一般生活全体で 6.3%、20～30 代女性全体においては 3.0%に過ぎない。20～30 代女性では 83.0%は明確に「知らない」と回答している。

【ポジティブリスト制度開始の認知】

	知っている	聞いたことはある	知らない
一般生活者全体 (n=400)	6.3	19.0	74.8
20～30 代女性全体 (n=600)	3.0	14.0	83.0
未婚女性 (n=300)	3.3	13.7	83.0
既婚女性 (n=300)	2.7	14.3	83.0

Q13. ポジティブリストで、およそ何種類の農薬を規制していると思いますか？

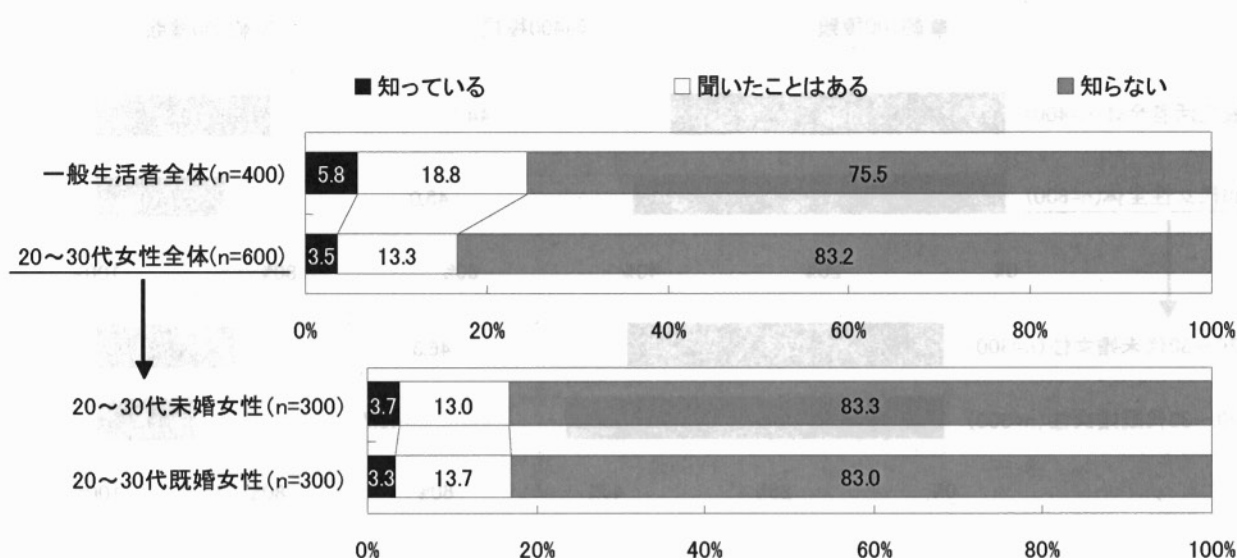


ポジティブリストの認知が極めて低い中での回答であり、何種類の農薬を規制しているかの質問に対しては、あくまでもイメージとして回答された結果である。実際には「約 800 種類」であるが、大半が「約 100 種類」「約 400 種類」のいずれかに回答している。

【ポジティブ制度で規制している農薬の種類の規模の認知】

	約 100 種類	約 400 種類	約 800 種類
一般生活者全体 (n=400)	36.8	44.0	19.3
20～30 代女性全体 (n=600)	41.0	45.0	14.0
未婚女性 (n=300)	37.3	46.3	16.3
既婚女性 (n=300)	44.7	43.7	11.7

Q14. 農薬の残留基準の設定には、「ADI(一日摂取許容量)」と呼ばれる数値が、基準になっていることを知っていますか？

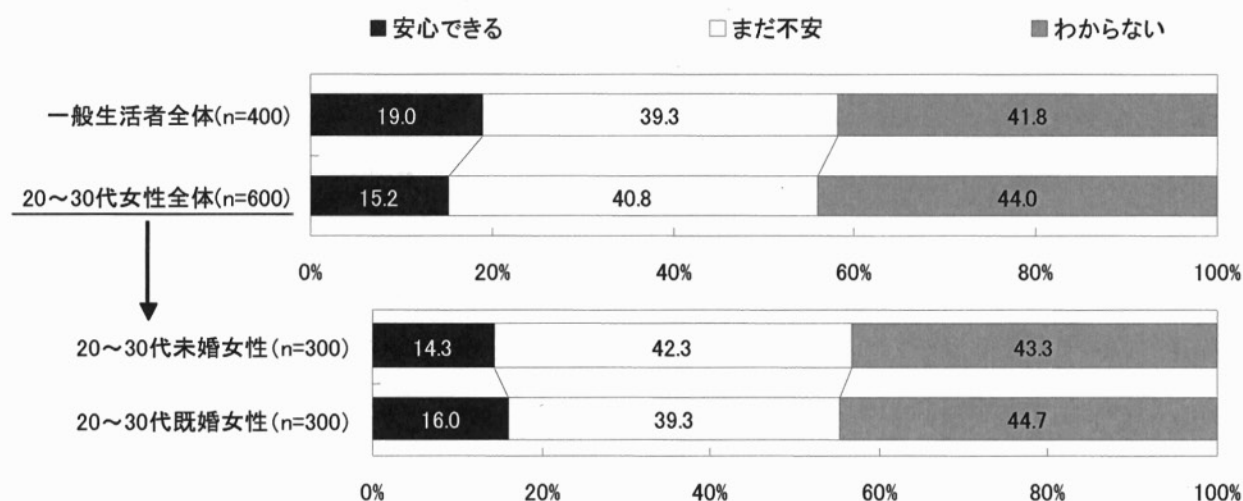


農薬の残留基準の設定には、「ADI(一日摂取許容量)」と呼ばれる数値が基準になっていることを「知っている」との回答は、一般生活者で 5.8%、20~30 代女性では 3.5%で認知度は極めて低い。ポジティブリスト制度と同様、20~30 代女性の認知がより低い。

【ADI の数値が基準であることの認知】

	知っている	聞いたことはある	知らない
一般生活者全体 (n=400)	5.8	18.8	75.5
20~30 代女性全体 (n=600)	3.5	13.3	83.2
未婚女性 (n=300)	3.7	13.0	83.3
既婚女性 (n=300)	3.3	13.7	83.0

Q15. ADI(一日摂取許容量)は、動物実験で得られた農薬の安全基準値と比べて 100 倍厳しく設定されています。この安全基準なら安心だと感じますか？



ADI(一日摂取許容量)は、動物実験で得られた農薬の安全基準値と比べて 100 倍厳しく設定されている事実を伝えた場合でも、「安心できる」との回答は一般生活者で 19.0%、20～30 代女性で 15.2%である。このように、野菜や果物に残留する農薬について大半の人は少なからず不安を感じているということがわかる。

【この安全基準なら安心と思うか】

	安心できる	まだ不安	わからない
一般生活者全体 (n=400)	19.0	39.3	41.8
20～30 代女性全体 (n=600)	15.2	40.8	44.0
未婚女性 (n=300)	14.3	42.3	43.3
既婚女性 (n=300)	16.0	39.3	44.7

